

武蔵野日曜聖書講筈

人の子は枕する所なし (1)

——マタイ伝第8章18～27節——

1993年7月4日

小池辰雄

黙禱 人の子 永遠の腕を枕に 死者は葬儀屋に キリストばか キリストの本願の信 キリ
スト神秘 (詩) 「主さまあなたは」 絶対恩寵の現実 不思議な力がきました

【マタイ8】

18 さてイエス群衆の己を環めぐれるを見て、ともに彼方の岸に往かんことを弟子
子たちに命じ給う。19 一人の学者きたりて言う 『師よ何処いずこにゆき給うとも、
我は従わん』20 イエス言いたもう 『狐は穴あり、空の鳥は罅ねぐらあり、然れど人
の子は枕する所なし』21 また弟子の一人いう 『主よ、先ず往きて我が父を葬ほうむ
ることを許したまえ』22 イエス言いたもう 『我に従え、死にたる者にその死
にたる者を葬らせよ』

23 かくて舟に乗り給えば、弟子たちも従う。24 視よ、海に大なる暴風あらしおこりて、
舟、波に蔽おほわるるばかりなるに、イエスは眠り給う。25 弟子たち御許にゆき、
起こして言う 『主よ、救いたまえ、我らは亡いぶ』26 彼らに言い給う 『なにゆ
え臆おそするか、信仰うすき者よ』すなわち起きて、風と海とを禁いめ給えば、大
なる風なぎとなりぬ。27 人々あやしみて言う 『こは如何いかなる人ぞ、風も海も従う
とは』

●黙禱

よく、「黙禱」と言いますが、あなた方は黙禱の時に何を祈っていますか。私は、黙禱と
いう時には、

「自分をキリストの中に入れる。キリストと一つになる」

それが私の黙禱のやり方です。ご参考にし申し上げておきます。

今日は「人の子は枕する所なし」という題でマタイ伝8章18節から始めます。

18 さてイエス群衆の己を環めぐれるを見て、ともに彼方の岸に往かんことを弟

子たちに命じ給う。

群衆がやってくる——或る時はもちろん、キリストは相手にされますけれども——ど
うも煩わしい。自分は静かな所で祈りたい、ということがよくある。これも、その意味です。



弟子だけは連れて行った。ところが、一人の学者がやって来た。「学者」というのは旧約の聖書に詳しい人を学者という。

19 一人の学者きたりて言う『師よ何処にゆき給うとも、我は従わん』
 こんなことを意地をかけて言つたつてダメなんです。

20 イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は罅あり、然れど人の子は枕する所なし』

「枕する所のない私と一緒に往けるか」

というわけです。なかなか、キリストの言葉は非常に現実でもあるし、また詩的でもある。

●人の子

「人の子」という言い方は、ちよつと調べる必要がある。誰だつて人の子なんだけれども、この「人の子」というのが特に大事なのは、ダニエル書7章13～14節です。

「¹³我また夜の異象の中に観てありけるに、人の子のごとき者雲に乗りて来り、日の老いたる者の許に到りたれば、すなわちその前に導きけるに、¹⁴之に権と榮と国とを賜いて諸民、諸族、諸音をしてこれに事えしむ。その権は永遠の権にして移りさらず、又その国は亡ぶることなし。」(ダニエル7・13～14)

「諸音」とは「いろいろな言葉」ということ。

「人の子」

という言い方でキリストを預言しているわけです。「人の子」というのは神秘的な表現です。ヘブライ語では

「ベン アダーム」

という。ギリシア語では

「ヒュイオス アントロープス」

という。「人の子」というのは「キリスト」のことです。神の子なんだけれども、「人の子」という。それは、いきなり「神の子」というとユダヤ人には冒瀆になる。それで「人の子」という表現で、隠して言うわけです。

「その権は永遠の権にして移りさらず、又その国は亡ぶることなし」
 と。キリストの国は亡びない天的な国です。我々はキリストの国の天国人です。天国は亡びない。

「天国は近きあり」

というの、キリストが天国の人ですから、我々はキリストを受けると、我々は地上にありながら天国人である。

ダニエル書7章13～14節は、そういう意味で、キリスト預言の所で、「人の子」という表現をしているわけです。同じ「人の子」という言い方で、エゼキエルそのものを「人の子」



と言っている所がある。エゼキエル2章1節にある。

「彼(神) われに言いたまいけるは、人の子よ起ちあがれ、我なんじに語わんと。²斯くわれに言い給いし時、霊、我にきたりて我を立ちあがらしむ。

不思議なことが書いてある。御霊がやつて来て、立ち上がった、と。

ここに我その我に語りたもうを聞くに、³われに言いたまいけるは、人の子よ、我なんじをイスラエルの子孫に遣す。すなわち、我に叛ける叛逆の民につかわさん。彼等とその先祖我に悖りて今日にいたる。」(エゼキエル2・1～3)

そしてまた、面白いことが書いてある。

「人の子よ、わが汝に言うところを聴け、汝かの悖逆の族のごとく悖るなかれ。汝の口を開きてわが汝にあたる者をくらうべし。⁹時に我見るに、吾方に伸たる手ありて、其中に巻物あり。¹⁰彼これをわが前に開けり、巻物は裏と表に文字ありて、上に嗟嘆と悲哀と憂患とを録す。」(エゼキエル2・8～10)

「彼また我に言たまいけるは、人の子よ汝獲るところの者を食え、此の巻物を食い往きてイスラエルの家に告げよ。²是に於て我口をひらけばその巻物を我に食わしめて、³我にいい給いけるは、人の子よ、わが汝にあたる此巻物をもて腹をやしなえ。⁴腸にみたせよと。我すなわち之をくらうに、其わが口に甘きこと蜜のごとくなりき。」(エゼキエル3・1～3)

そういう巻物を食べるようなことは黙示録にも出ています。

同じ「人の子」という言葉は、マルコ伝の2章10節、13章26、27節、14章62節に出ていますが、これも、「神の子」という代わりに「人の子」という隠したような表現です。

●永遠の腕を枕に

²⁰イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は罅あり、然れど人の子は枕する所なし』

私には枕する所がないと。一所不住で、キリストは自分の家がない。ナザレから出てしまった。キリストを迎える人の所に行つては泊まっている。泊める人がいなければ、正に石の枕です。讚美歌の404番『山路こえて』の中に、

「山路こえて ひとりゆけど、

主の手にすがる 身はやすけし。

……

日もくれなば 石のまくら

かりねの夢にも 米国しのぼん」

とある。キリストは枕する所がない。けれども、枕する所がない人は、どこでも枕にする。木の根であろうと、石の上であろうと。人が呼べば、人の所で。自分の家がない。しかし、



その枕するその枕はいつたい何かというのと、神さまの腕だ。キリストは何を枕にしても、父なる神の腕を、永遠の腕を枕にしている。

「永遠の腕」

という言葉がある。それを枕にしていらつしやる。もうひとつ言えば、

「父なる神の懐ふところの中に入れてしまう」

懐で寝ているひと。だから、何処でもそこが父の懐だから、非常に安らかに眠ってしてしまう。枕する所の無いひとは至る所を枕とする。これは面白い。

本当の無は即、有。無即有。有るといつて、相対的な有ることを喜んでいるのはダメなんです。この相対的な「有る」というものは、これは本当は「無」だ。有は無である。有、即無。そういう境地をつかんでいないと、魂が行き詰まる。

「有れども無きが如く、無けれども有るが如し」

とパウロの言葉にもある。それが本当の魂の自在な在り方です。

●死者は葬儀屋に

21 また弟子の一人いう『主よ、先ず往きて我が父を葬ほうむることを許したまえ』

22 イエス言いたもう『我に従え、死にたる者にその死にたる者を葬ほうむらせよ』

すぐこういうことを言うんだね、

「主よ、先ず往きて我が父を葬ほうむることを許したまえ」

と。

「お前はすぐ伝道にゆけ。他の相対的なことを考えるな。何も持つていくな、杖一つでたくさんだ」

と、これが本当の伝道のすがたです。聖書一巻あればいい。

「死にたる者にその死にたる者を葬ほうむらせよ」

とは、これは誤訳です。

「死者は葬儀屋に任せよ」

という言葉なんです。アラミ語で

「マッター（死者）」

という字と

「ミッター（葬儀屋）」

という字がある。アラミ語やヘブライ語では母音を書かない。子音だけだから、子音だけを同じように読んでしまったから、

「死にたる者にその死にたる者を」

となった。本当は、

「マッター（死者）はミッター（葬儀屋）に任せよ」



「死者は葬儀屋に任せて、お前は来なさい」ということです。

「従うというなら、無条件にやって来い」

と。普通の常識からいうと、随分、キリストは無情だと思っただけでも、そういう意味で、こういうところは無情というように考えてはいかん。

「鋤すきを手にして耕しかかったら、後ろを顧みるは我にふさわしからず」

ということだ、

「福音のことに携わつたら、神さまに従おうと思つたら、他の余計な事を考えるな」ということです。本当に従っていくというと、捨てたと思つたことがちゃんとできるようになる。そういうようになっていく。

「相対的にあれやこれやを思うことは却つて分散してしまつてダメだ」というわけです。

23 かくて舟に乗り給えば、弟子たちも従う。24 視よ、海に大なる暴風あらしおこりて、舟、波に蔽おほわるるばかりなるに、イエスは眠り給う。

そういう嵐の中で、舟の中でキリストは眠っている。そうしたら、弟子たちが起こして、

25 弟子たち御許にゆき、起して言う『主よ、救いたまえ、我らは亡ぶ』

「舟がひつくり返りますよ。何とかしてください」

というようなわけだ。

26 彼らに言い給う『なにゆえ臆おそするか、信仰うすき者よ』すなわち起きて、風と海とを禁め給しえば、大なる風なぎとなりぬ。

大変なひとです。こういう所を読むだけで参つてしまう。本当にキリストは神さまと分かつたことのできない現実にいる。いつも全く一つ。正に一如の世界です。「信仰」ではない。信仰というのはもうやめたらいい。一如の世界。

「信じ仰いでいる」

なんて言つたつてダメ。

「私はキリストを信じていません。キリストと一つです」

と、それが本当なんです。

「キリストを信じてないクリスチャンがあるか」

なんて普通は思うでしょう。「キリストを信じている」クリスチャンなんて大したことはない。

「キリストと一つです」

ということが本当なんです。

「我もはや生くるにあらず、キリストわがうちに在りて生き給うなり」(ガラテヤ2・20)

という、パウロのあの告白が本当です。



●キリストばか

皆さんも、そういう単純な、非常に単純なひとになるといい。キリストを対象化してない。内在している。

「我れキリストの中に、キリストわが中に」

という内在関係、それが一如の世界です。キリストはそういうようにして、父と一つだから、

「我と父とは一つなり」

と、ヨハネ伝10章ではつきり言っている。ああいう言葉が非常に大事です。

「我とキリストは一つなり」

ということ。

「そうですか、私はなかなか一つになれません」

ではない。キリストは、

「遠慮するな。私は十字架でお前を全部贖い取ってしまったから、遠慮なく入って

きなさい」

と仰る。キリストの中に入ると、これは聖霊の世界です。さつき、エゼキエルが

「霊によつて立ち上がった」

とあつたが、そういうわけです。

「十字架即聖霊」

ということになる。十字架と聖霊は離すことができない。十字架を抜きにしたらダメです。よく、

「聖霊、聖霊」

という人が十字架をいい加減にしている。それはダメだ。十字架の土台がはつきりしてないと本当の聖霊でなくなる。ヘタするとサタンになる。サタンは十字架が嫌いなんだ。

大いなる嵐の中のひっくり返りそうな舟の中で、キリストは眠っている。

「神さまはひっくり返すか」

というわけだ、キリストには。とにかく、徹底的に我々は

「キリストばか」

みたいにならなければダメだ。

「自分の信仰」

なんていうものを考えたらダメです。

「信仰うすき者よ」

なんてキリストが言うものだから、

「信仰はあつくなければならぬ」

なんて思うけれども、

「私は信仰なんかありません。あるのはあなただけです」

とキリストに言ったらいい。

●キリストの本願の信

26 彼らに言い給う『なにゆえ臆するか、信仰うすき者よ』すなわち起きて、

風と海とを禁め給えば、大なる凧となりぬ。

風と波とを、

「風吹くな、波たつな！」

と言って、霊界の法則で物理法則を抑えてしまう。

27 人々あやしみて言う『こは如何なる人ぞ、風も海も従うとは』

これはもう全く、

「こは如何なるひとぞ」

だ。風も波もみなひききがつてしまう。日蓮が佐渡に渡るときに海が荒れたので、竿で

「南無妙法蓮華経」

と波の上に書いたたら、波が静まったという。あれは本当でしょう、日蓮くらいの坊さんになれば。私はそういう世界は本当だと思う。本当の信仰の世界はもの凄い世界だから、「これでいい」なんていうところはない。

だから、いい加減な信仰なんてものは持たない方がいい。何も無い方がいい。そうすると、逆に上からキリストの本願の信がくる。こちらの悲願ではない。本願の信が入ってくる。この信は強い。何でも上から受けとるんです。

こつちからの人間的な一生懸命や熱心なんかは疲れてしまう、くたびれてしまう。何も要らない。全身を開けはなして、全身で受けとる。これを身受、体受という。この受けとり方をしないとダメです。この受けとり方をするのが本当の信仰の世界です。

受けとるのだからいいではないですか。全身だよ、ただ頭でもなければ、ただ心でもない。全身で受けとる。キリストに全身でぶつかっていく。キリストに抱かれる、捕まえられる。ぶつ倒れれば、キリストがつかまえる。

それが本当の無の世界です。無のすがたは平伏しです。無をもし形で表すなら、大地に平伏していることが無なんです。神の前に平伏せ。そうすると、それはもの凄い力で立ち上がられる。自分で立ち上がるのではない。

キリストの言い方が、

「信仰うすき者よ」

なんて仰るものだから、これに躓く。

「100%に自分を開け渡せ」

と、それが信仰です。なにしろ、風と海を静めてしまうんだから、大変なひとだ。それは、キリストが偉いのも何でもない。本当に父なる神と、一つとなっているから、天来の力が



くるから、キリストはこういうことができた。キリストは預言者や使徒たちともケタが違う。絶対次元に入っている。我々もキリストの中に十字架を通して入れれば、その現実を受けとる。疲れを知らなくなる。絶対に行き詰まらない。

●キリスト神秘

「絶対」という言葉は素晴らしい言葉だ。対称が無いということ、対称に絶するということとです。絶対というのは相手が無い世界なんです。だから、絶対は一如の世界です。一如の世界が絶対界だ。

摩訶不思議でも何でもない。本当の神秘というものは神と、一つになっている世界。キリストと、一つとなっているところが本当の神秘です。パウロの

「クリストス ミュステイーク」(キリスト神秘)

というのはそういうものです。

「我れキリストのうちに、キリストわがうちに」

という、パウロはその境地に入った。だから、すごい使徒になった。ヨハネも、ペテロも終いにはみなそうです。三人の使徒にはそれぞれの相がありますけれども。

山に「登る」とは言わない。山に「入る」、入山という。「入」の世界が大事です。キリストの中に、入る。山を「征服する」なんていうのはとんでもない言葉だ。

山に行けば、山と化るわけです。それに化するわけです。海に行けば海となる。木を見れば木となる。花を見れば花となる。そういう「内観」、内側から観ることが大事なんです。

そうすると、この「観」はもうひとつ別な「感」になる。「内感」する。観るばかりでなく内感する。人間の一番大事なのは、感ずるということです。体感する、身体で感ずる。ただ目で見ているだけではダメなんだ。キリストを体感したらエライことになる。もの凄いい力がくる。

●(詩)「主さまあなたは」

私の讚美歌に『主さまあなたは』(召団讚歌A49)(1988年8月3日作、讚美歌48「しづけき夕の」の曲で)というのがある。

1 十字架・聖霊の 主さま あなたは

我れを救いて 戦わせ給う

2 主さま あなたは わが御光よ!

我れをつらぬき かがやきたまえ

3 主さま あなたは わが肉の靈肉

あなたを喰い 永遠にぞ生きん

4 主さま あなたは わが骨の靈骨



わが脊椎に 聖手^{みて}按きたまえ
 5 主さま あなたは わが血の血なり
 天の生命^{あめ}を ひとにわかたん
 6 主さま あなたは 愛の愛なり
 この愛をもて ひとを助けん
 7 主さま あなたは 歌の詩歌^{うた}なり
 生涯^{いのち}の限り 聖名^{みな}を讃えん！
 8 主さま あなたは わが身のすべて
 あなたと一如^{ひとつ} アーメン ハレルヤ

キリストが私の肉の肉、骨の骨、血の血、愛の愛ということ。あなたと一如^{ひとつ}ということ。だからもう、「信仰」なんて言う必要はない。

●絶対恩寵の現実

「我と父とは一つなり」

とキリストが言われた。私たちは、

「私とキリストとは一つなり」

という、絶対恩寵の現実です。

「そうですか、一つになって偉いですね」

なんて、ひとつも偉くもない。キリストの絶対恩寵で一つにされているわけです。絶対恩恵の世界だから、はっきり言えるわけです。

「エラく悟ったから、一つになりました」

なんて、そんなことではない。

「十字架と聖霊で一つにされました」

ということ。です。

神無き民主主義は驕^{おご}る。ダメです。日本の民主主義は神無き民主主義だ。

「アンダー・ゴッド(神の下に)」

でなくては。「敬天」でないから。西郷南洲が「敬天愛人」と言った。

シナ人は神さまのことを「天」「天帝」という。天という言葉は非常に靈的に広い言葉です。この天という言葉は概念的に限定なんかできない。

「天に在^{いま}す我らの父よ」

という、この「天」というのは靈界のことです。物理的な空間ではない。ただ表現としては、人間の目で仰ぐような天を言うんだけど、その物理的な表現の奥に靈的な現実を語っている。神話的な表現はみなそうです。

6節の歌詞に、



「主さま あなたは 愛の愛なり
この愛をもて ひとを助けん」

とある。愛するとは助けることです。世界中の人は全部、兄弟姉妹です。国境はやむを得ずあるので、本当は国境なんかない。

「敵を愛せよ」

というけれども、敵はいないんだ、みな兄弟姉妹だから。

『敵を愛せよ』と仰るけれども、私には敵がありません。向こうは敵だ思っているけれども、こっちは敵だとは思っていません」

とはつきり言える。そこまで魂が突き抜けないとね。

「いくらでも憎んでください。お気の毒でございませぬ、あんたは可哀相だねというだけの話です」

と。だから、私は何か楽でしょうがない。やっと89歳になって、そんなことを言っているのだから、遅いんですよ。あなた方若い人はどんどんそういう境地に入ってください。そういう点で、私が本当に尊敬するのはアッシジのフランチェスコです。

●不思議な力がきました

26 彼らに言い給う 『なにゆえ臆するか、信仰うすき者よ』 すなわち起きて、

風と海とを禁め給えば、大なる風となりぬ。

「いやあ、キリストは凄いなあ」

ではなくて、この凄いキリストの中に自分を投げ入れなくては。

「何だか知らんけれども、不思議な力がきました」

ということになる。

預言者や使徒たちや、そして最後にはキリスト、彼らと一つとなつていかなないとね。使徒たちや預言者と一つになるには大したことはない。

「キリストと一つになる」

には大変なことだ。大変なことだけれども、実はこれが一番やさしいことなんです。相対的現実でないから、絶対的な現実だから。

註解書なんか要らない。聖書の文字をジューツと読んで瞑想して、その文字の奥の世界に入ってしまう。もう、七面倒臭い研究書なんかひとつも要らん。聖書研究なんかしたら、聖書が分からなくなる。聖書研究会なんかやめた方がいい。

あなた方は、地域的に近い人は時々、二、三人でも三、四人でも集まって、一緒に聖書を読んで祈ったり讚美歌を歌ったりすればいいですよ。

世界中、兄弟姉妹だから、どこへ行つても、相手を本当の意味で尊重するわけです。敬愛するわけです。「敬愛」という言葉はいい言葉だ。尊敬し愛する。互いに助け合う。



聖書というものは、祈りながら瞑想しながら読むと、本当に一頁も読めないような書だ。どの頁も凄い現実だから。

みんな、力が来ましたか？ 楽しくなりましたか？ 楽しくて力がこなければウソだからね。絶対に頭で読める本ではないですから。頭で読んだら、なおさら分からなくなる。頭で読むと、「聖書は愚か」です。

「ギリシア人には愚かで、ユダヤ人には躓きだ」

とある。律法的に読んだら、躓きになる。

「モーセの十誡」ではない。あれは「十言」です。戒めではない。

「汝、わが面の前に何ものをも神とすべからず」

ではない。

「汝にとつては、わが面の前には、諸々の神はあれども無きがごとし」

という意味なんです。「わが面の前には」とは、

「お前と私は一対一の関係だろ。他に神さまはあるよ。けれども、それは問題にな

らない、相手にならない」

という、人格的な一対一の関係です。

我々の関係もそうなんです。AとBとの関係、BとCとの関係、CとAとの関係は、それぞれが絶対性をもっている。比較してはいかん。人間というものは比較したらダメなんです。それぞれ絶対性をもっている。相対的な現実でありながら、絶対性をもっている。それが本当の人格関係という。

そうしたら、世界は平和ならざるを得ない。それぞれお互いに敬愛していくんだから。軍備のことなんか考える必要はない。

「エホバはもろもろの国のあいだを裁き、おおくの民をせめたまわん。斯てか

れらはその剣をうちかえて鋤となし、その鎗をうちかえて鎌となし、国は国

にむかいて剣をあげず戦闘のことを再びまなばざるべし。」(イザヤ2・4)

と、イザヤの預言は素晴らしい。そういうようになるはずだ。戦争なんか自然になくなってしまふぞと。イザヤ書は素晴らしいから時々読んでくださいよ。

